

「ブリタル反乱(1)」(2019年12月16日)

スプリヤディ Soeprijadi/Supriyadi は東ジャワのトレングレツ Trenggalek で1923年4月に生まれた。小学校はオランダ系プラナカン子弟にオランダ語で教育を与えるELSに通い、青年期にはマグランの官吏養成学校で学んでいたから、オランダ植民地制度下で下級官吏を務めたジャワ人プリアイ層がかれの家庭環境だったように思われる。プリアイというのはジャワの王族貴族階級であり、一般民衆にとっての伝統的支配階層を成していた。

日本軍のジャワ島占領でかれの人生は一大転換を遂げることになった。19歳のかれは日本軍が設けたタングランの青年道場に志願して入隊する。

1943年10月3日、地元民族だけによる軍事組織編制を命じる治政令 osamu seirei 第44号が布告され、ジャワ島にジャワ防衛義勇軍が発足した。軍隊組織を構成するための指揮官養成機関がボゴールに置かれてジャワ防衛義勇軍幹部錬成隊と称し、タングランの青年道場がその中に発展的に吸収された。

それがインドネシアで Tentara Sukarela Pembela Tanah Air (郷土防衛義勇軍) 通称PETAと呼ばれた純民族系軍事組織の端緒であり、スプリヤディはその発端から流れの真ただ中を歩いたのである。

ジャワ防衛義勇軍幹部錬成隊で指揮官選抜考査が行われたとき、対象者は2,088人にのぼり、その中には王家の息子、つまり王子、が11人含まれていた。ソロ王家が10人、ヨグヤ王家が1人だったそうだ。

心身ともに健全であることは言うに及ばず、教育レベルが高いこと、社会ステータスが一般民衆より高いことが指揮官にとって大きいメリットになるわけで、王族貴族の子弟はたいていその要素を満たしており、実際にPETA将校の大半がかれらで占められることになった。ヨーロッパ諸国の軍隊を見ても類似の傾向が感じられる。ノブレスオブリージュはかれらが戦場に出るときの動機でしかなく、王族貴族たちの戦場での役割は別のロジックが使われていたことを理解すべきだろう。

PETAは地域を踏まえた軍隊構成を成し、大団から中団・小団・分団という階層構造で構成された。大団は大隊に相当し、その中に中団・小団・分団を含んで522人の士官と兵で構成された。中団は中隊に相当して80~225人の要員を持ち、小団は小隊で26~55人から成っていた。

1943年末にはジャワ島を35の大団がカバーし、二年後にはジャワ島バリ島を69の大団がカバーするに至った。総兵員数は3万7千5百人にのぼり、スマトラ島にはまた別に2万人の兵員がPETAの戦力を支えていた。

だが誤解してはいけない。PETAが純民族系軍事組織というのはその指揮系統の中に日本人が置かれていないという意味であり、この異民族武装集団を日本軍が百パーセント野放しにしていたということでは決

してない。各大団には二～三人の日本軍将校と四～五人の下士官が関与し、管理・連絡・訓練などの分野を握って監視と監督の任に当たっていた。

1943年12月25日、クディリ州 Karesidenan Kediri にはクディリに第一大団、ブリタルに第二大団が置かれた。第二大団は大団長の下に大団副官、本部小団、衛生係、演習係、人事係、兵器係、経理係、物品係、大団旗係があって、大団指揮系統下にそれぞれが三個小団を従えた四つの中団で構成されていた。スプリヤディは第三中団第一小団長であり、同僚の第二小団長はムラディ Moeradi、第三小団長はスクニ Soekeni、第三指揮班長のスナント Soenanto 分団長がチプトハルソノ Tjiptharsono 第三中団長直属の部下だった。

スプリヤディとムラディは共にボゴールのジャワ防衛義勇軍幹部錬成隊第一期生として学び、厳しい訓練を互いに励ましあいながら乗り越えてきた同期の桜であり、肝胆相照らす仲だった。ふたりは深い信頼関係で結ばれていたのである。

第三中団はブリタル県パングンレジョ Panggungrejo 郡セラン Serang 海岸やタンバツレジョ Tambakrejo 海岸での作業を受け持った。[続く]

およそ半年間ブリタルでさまざまな訓練が行われてから、1944年5月にブリタル大団は海岸部の防衛線として防御陣地や塹壕の構築作業を日本軍に命じられた。

「ブリタル反乱(2)」(2019年12月17日)

建設作業は地域の地元民が強制的に労務者に徴用され、PETA兵員たちと一緒に働いた。地元民の生活を支えるための勤労がその強制労働に挿げ替えられ、農民がほとんどの地元民たちが生きていくための食糧生産ができなくなり、一方でほとんど報酬のもらえない強制労働では夜中まで働かされ、栄養不良と過労が病気を引き寄せ、少なからず死者が出た。

インドネシア語 romusha あるいは romusa という言葉は日本語の労務者の意味ではない。その言葉はインドネシアで強制労働者／奴隷労働者を意味しているのである。労務者という言葉で呼ばれた人間とそこで行われたものごとの内容がインドネシアでその語義を生み出したことは言うまでもない。

一方でブリタルに駐屯している日本軍将兵のプルンプアン漁りも、性的に禁欲的なムスリムであるかれらの目を覆わせるに足るふしだらな行為であり、その対象にされるプリブミ女性への同情が高まった。

ひるがえって見てみるなら、ブリタル地区における日本軍政はオランダ人に負けず劣らずの圧政を行ない、農民の収穫は収奪され、日本兵はプリブミ女性を手籠めにし、そして同じアジアの同胞と言う口の下から人種差別が臆面もなく繰り広げられた。日本人のインドネシア人に対する差別、そして劣等視は、日本人が作ったPETAのメンバーに対してすら頻繁にその影をちらつかせた。日本軍はPETAの将校に対して、自分より下の階級であっても日本人将校に敬礼するよう義務付けたのである。

PETAの使命は元々、インドネシアの防衛が最優先事項であり、連合軍の進攻を日本軍と共同して防衛し、もしも上陸されたなら民衆ゲリラとして抵抗戦を展開するという構想になっていた。だが結果的に言うなら、連合軍のジャワ島上陸進攻は起こらず、日本軍と入れ替わったNICA(オランダ植民地文民政府)との間でのゲリラ戦という皮肉な結末になっていったのだが。

だからスプリヤディ小団長は担当地区のセラン海岸で毎日毎日インド洋を見つめながら平和な日々を送っていたら、また運命が変わる日がやってきたはずなのだが、自分の運命を自分の手で紡ぎ出そうとする若者の姿は今も昔も変わらない。

その当時、かれがセラン海岸の波打ち際にある巨岩に座って瞑想に浸っていた姿を多くの住民が頻繁に目にしている。クバティナンの世界に深く沈潜しているかれの姿がそれだった。かれの若きプリヤイの血が義憤に燃えて泡立っていたのは間違いあるまい。スプリヤディの胸の奥に、日本軍政を許してはおけないという気持ちが降り積もって行った。日本人に一太刀浴びせ、一矢を報いなければ、ジャワ人としての誇りが許さない。スプリヤディは同志を探した。

初めての会合はハリル・マンクディジャヤ Halil Mangkoedidjaja 分団長の個室で行われ、ムラディ小団長とスマルディ Soemardi 小団長の三人がスプリヤディと議論した。1945年2月14日に勃発したPETAのブリタル反乱では、その四人が中心人物となったのである。タルムジ Tarmoedji 分団長は同志だったが、かれは不審な人間を近付けないための見張り役に徹した。

そのときの会合で四人の受け持ち分担が決められた。ムラディとハリルがブリタル大団内で同志を糾合する。他の大団を誘って一斉蜂起を促すことをスマルディが担当する。スプリヤディはPETAの外部者、世間一般の大衆に反日抗争への参加を働きかける。

1944年6月、ブリタル大団の全将校が大団本部に集合を命じられた。大団長の新方針説明が行われるのだ。説明会の行われる深夜の直前に、二回目の秘密会合がハリルの個室で開かれた。そこにスダルモ Soedarmo 分団長とスルヨノ soerjono 分団長が新たに加わった。

三回目の秘密会合に集まったのは12人で、スバルヨノ Soeparjono 小団長、Sジョノ Djono 小団長、スナルヨ Soenarjo 小団長、ダルシップ Darsip 小団長、スマント Soemanto 分団長、プジアント Poedjianto 分団長が新たに参加した。衛生係イスマギル Dr. Ismangil 軍医中団長は会合に出席しないが、既に同志を表明していた。[続く]

「ブリタル反乱(3)」(2019年12月18日)

1945年2月5日にトゥバン Tuban で十大団の合同軍事訓練が予定されたことから、スプリヤディー派はそのときに反乱を起こして日本人を皆殺しにする計画を組み、軍事訓練にまぎれて反乱を実行する部隊に武

器弾薬と食糧を分配して蜂起を確約した。合同軍事訓練の中でかれらが反乱を実行し、反乱の趣旨を他の大団に説明して協力を促せば、必ず賛同する部隊が現れる。これは願ってもない好機である。

ところが合同軍事訓練は直前になって中止され、ブリタル大団は本拠地に戻るよう命じられた。理由はボジョヌゴロ Bojonegoro 大団長の死亡ということだったが、その死に関する説明はなにひとつなく、しばらくしてから日本軍に殺されたのだという噂が広がりはじめた。

ブリタル大団が本拠地に戻ると、PETA将兵に対する統率がいきなり厳しくなった。5人以上連れ立って行動したり、群れていてはならない。金曜日や日曜日の外出は禁止。将兵を訪問してくる家族や民間人に対して大団の状況を話してはならない。大団の監督監視に当たっている日本人指導官の目が厳しく光りはじめた。

2月9日、スプリヤディはPETA指揮官寮を抜け出して姿をくらました。翌10日16時ごろ、ホシノ指導下士官が酒に酔って軍刀を抜き放ち、寮の中でゆらゆらと太刀を揺らしながら大きい声でわめいた。「小団長、マウブロンタヤ？ Mau berontak ya?」それを見たムラディ小団長の顔色が変わった。かれは部下にスプリヤディを探してその出来事を伝えるよう命じた。

指導下士官が本当に酔っていたのか、それとも酔ったふりをしていたのかを確言できるPETAの将校はいなかった。一方のスプリヤディはそのとき、ブンド Bendo 村のクジャウエンの師であるンバ・カサン・ブンドの家になっていた。心中の迷いを整理するために、かれは師の指導を仰ぎに来ていたのである。師の言葉はこうだった。「今はまだ、日本軍に正面切って立ち向かう時期ではない。もう四か月待つべきだ。だがお前がどうしても立つと言うのなら、わしはそれを祝福しよう。おまえの闘いはわれらの祖国から侵略者を打ち払い、われらの民の苦難を軽減する高貴な努力なのだから。」

2月13日20時、ハリル・マンクディジャヤの個室で秘密会合が行われた。25人が集まった。反乱計画の核をなす四人は同志たちに決起を促した。その日14時ごろ、ブリタル駅に列車が到着し、その一車両にはスマランの憲兵隊がひしめいていたことを大勢が知っている。憲兵隊はそのままブリタル市内の日本軍将校宿舎になっているサクラホテルに入った。

指導下士官のふるまいと言い、憲兵隊の増強と言い、日本軍がすでに反乱計画を察知していることはそれらが明白に物語っている。かれらは早晩、われわれを逮捕しにやってくる。

われわれは裁かれ、悪くすれば死刑になる。決起しようがしまいがその結末が同じであるなら、何のためにただ座してその結末に身をゆだねようとするのか？われわれは早急に行動を起こすべきではないのか？そうして結論が出た。

1. 今夜のうちに、われわれは行動に出る。これはインドネシア民族の独立と主権を勝ち取るための行動である。

2. どの国であろうとインドネシアを支配下の自治領にすることは許されない。われわれは独立主権を手に入れるための軍事行動を起こすのである。

3. 外国人支配者の圧制と搾取を根絶やしにして国民の苦難を打ち切るために、われわれは勇気を持って戦い、身命を犠牲にすることも厭わない。

4. 反乱の結果として、捕らえられ、拷問され、死刑になる可能性は大きい。だからと言って、われわれが同胞インドネシア民族の生命を奪うことは極力避けなければならない。

スプリヤディは矢継ぎ早に命令を下した。スマルディとハリルは武器弾薬・食糧・資金を運び出すために車両を用意し、武器庫・食糧庫の扉を開け。ムラディは戦闘部隊の編成を行い、全体の指揮を執れ。

ダスリップ小団長の部隊はブリタル市内を制圧してからロドヨ Lodoyo 地区に向かい、その間に日本人を全滅させること。その後ギムツ Ngimut でジョノ小団長の部隊と合流し、トゥルンガグン Tulungagung に移動する。[続く]

「ブリタル反乱(4)」(2019年12月19日)

ジョノ小団長の部隊はクディリ街道経由でスルガツ Srengat に陣取り、クディリから来る日本軍を阻止すること。またヤルワディ Jarwadi 分団長にグロンドン Grondong 橋守備を命じ、ブリタルから追跡する日本軍の進行を阻止させること。

スパルヨノ小団長の部隊は、アディ・ウィダヤツ Adi Widajat 分団長に命じてブリタル市内で、1) 監獄の囚人を解放させる。2) サクラホテルを含むブリタル市内の日本人を全滅させる。3) 協力せず、あるいは邪魔をするプリブミ警官を武装解除する。という作戦を実施させてから、カリプチュン Kalipucung でクディリから来る日本軍の阻止に当たるジョノ小団長の部隊に合流させる。

ムラディ小団長の部隊はポンゴツ Ponggok 方面に進出し、その後パンチュラン Panceran の森に防衛陣地を設ける。

第四中団は重機関銃をもって憲兵隊本部と指導官宿舎を攻撃する。スマント Soemanto 分団長の部隊は東方に出てマラン Malang の片桐部隊の出撃を阻止する。

アツマジャ Atmadja 分団長は車両の手配、スヨノ分団長は兵器の手配を行うこと。

24時ごろ、作戦要綱に従って反乱軍は個々に動きを開始した。兵員はひとりあたり150発の銃弾と手りゅう弾4個が支給された。全員が忙しく準備に没頭しているとき、スプリヤディは私服のまま背にクリスを差し、ピストルを手にしてひとびとの中にいた。

準備が整った反乱軍は出撃して行った。ブリタル市内と外部を結ぶ電話線はすべて切断された。午前3時

ごろ、サクラホテルに8発の迫撃砲弾が撃ち込まれ、一斉射撃が続いた。

憲兵隊本部では建物正面と西側から重機関銃、北側から軽機関銃の銃撃音が鳴り響いた。

しかしその夜に限って、ブリタルの街中に日本人の姿が見当たらない。サクラホテルも憲兵隊本部ももぬけの殻になっていた。反乱行動はすっかり日本軍に察知されていたのである。反乱軍は日本軍の手のひらの上で踊らされていたということになる。

こうして始まったブリタルの反乱は、他の地域に飛び火することなく鎮圧されてしまった。この反乱をブリタル大団の反乱と呼ぶ人もあるが、大団という組織が反乱を起こしたわけでは決してない。反乱首謀者の小団長や分団長たちは兵士に対して、反乱に加わるかどうかを本人の自由意思にゆだねた。スプリヤディは大団長に対して反乱に加わるよう誘い、説得したが大団長はそれを拒否した。拒否した上官を反乱者が肅正するようなことはまったく起こらなかった。そうであっても、反乱軍の将兵は360人にのぼったのである。大団の65%が自由意思で反日反乱軍になったということだ。

日本軍はこの反乱鎮圧に総力をあげた。一号勤務隊を編成して各反乱部隊の抑え込みと解散に努め、反乱を良しとしない他のPETA大団が反乱軍の戦意を奪い去った。反乱軍戦闘部隊総指揮官になったムラディ小団長に対して降伏を説得するべくカタギリ大佐が乗り出し、交渉の末に反乱軍をブリタル大団に復帰させることに成功した。

ムラディ小団長はパンチュランの森に設けた防衛陣地で2百人ほどの兵員と共に抗戦態勢に就いていた。停戦交渉に訪れたカタギリ大佐や他の将校たちとムラディの間で話し合いが始まる。

戦闘をやめて降伏し大団本部に戻れ、とカタギリ大佐が求めるとムラディは、武装解除をしないこと、取り調べや裁判をしないことを約束せよと日本側に要求した。カタギリ大佐は即座にその要望を受け入れ、自分の約束に嘘はない、とみずから軍刀を外してムラディに渡した。そのふるまいは反乱軍将兵や同行した日本軍将兵の眼前でなされている。

ところが反乱軍が原隊復帰してから憲兵隊が反乱者を逮捕し始め、大勢が逮捕されて取り調べを受け、最終的に78人が軍事法廷に引き出されたのである。ムラディはもちろんその中のひとりだった。その成り行きからカタギリ大佐の行為を「サムライの誇りを投げ捨てた狡猾で卑怯な仕打ち」として非難する声がインドネシアに少なくない。[続く]

「ブリタル反乱(5)」(2019年12月20日)

しかしながら、反乱の中核の座にいて、大勢の人間をその挙行に巻き込み、行動計画を与えて反乱軍を

送り出したスプリヤディはその姿をかき消したのである。最終段階の軍事行動にかれ自身は参加せず、硝煙漂うブリタルから単身でふつつりと消え失せた。だから憲兵隊が逮捕した数百人の反乱者の中にスプリヤディの姿はなかったし、逮捕者のだれひとりとしてスプリヤディに関する情報を持つ者もいなかった。

裁判にかけられる反乱者は3月8日にジャカルタに移され、軍事法廷は4月14・15・16の三日間、法務部建物内で開かれた。しかし裁判が開始されるまでの間に、拷問で4人が死亡している。

軍律会議と呼ばれた最終取調べと判決処分言い渡しの場には、オットー・イスカンダル・ディナタ Otto Iskandar Dinata、R. アビクスノ Abikoeso、カハル・ムザキル Abd.Kahar Moezakkir、スポモ医師 Prof.Mr.Dr.Soepomo の四人の社会的著名人プリブミとカスマン・シゴディメジヨ Kasman Singodimedjo ジャカルタ大団長およびマス・スディロ Mas Soediro クディリ大団長が特別傍聴人として出席した。

反乱者に下された判決は次の通りだ。

死刑6名：イスマギル軍医中団長、ムラディ小団長、スバルヨノ小団長、スナント分団長、ハリル・マンクディジャヤ分団長、スダルモ分団長

終身刑3名：アミン分団長、プジ分団長、スカルディ分団長

服役15年6名：スカンダル中団長、バリ小団長、スナルジョ小団長、スナルディ小団長、Sジョノ小団長、アディ・ウィダヤツ分団長、

服役10年6名：スヨノ分団長、スカルマン分団長、ムリヨノ分団長、スラツ分団長、スマディ分団長、ムジャリ義勇兵

服役7年4名：スハディ小団長、ダルシップ小団長、ソッフアン分団長、イマム・バツリ分団長

受刑者は4月17日にチピナン刑務所に送られ、そのうちの半数が4月29日にバンドンのスカミスキン刑務所に移されている。

死刑囚6名の処刑は1945年5月16日にジャカルタ北部のアンチョル海岸で執行された。現在イーレフェルド Ereveld 墓地になっている場所だ。処刑方法は「日本軍の伝統的処刑方法である」日本刀による斬首刑だったと書かれているインドネシア語資料ばかりが見つかる。ムラディは日本人大佐が腰の日本刀をかれに渡したパフォーマンスに騙され、結局日本刀で頭を落とされたというコメントがかれにまつわるインドネシアの定評になっているように見える。

しかし旧日本軍の死刑は銃殺刑が正式方法であり、斬首はその規定に違反することになる。

陸軍刑法21条に「陸軍ニ於テ死刑ヲ執行スルトキハ陸軍法衙ヲ管轄スル長官ノ定ムル場所ニ於テ銃殺ス」とあり、海軍もこれに準じて、海軍刑法16条に「海軍ニ於テ死刑ヲ執行スルトキハ海軍法衙ヲ管轄スル長官ノ定ムル場所ニ於テ銃殺ス」と定めている。

陸軍刑法の制定された1881年(明治14年)当初から、サムライ時代の伝統的処刑方法が明治維新で一新されたことをそれは示している。明治維新がサムライ文化と武家社会からの決別であるという理解は日本人

の常識の中に確立されているのではなかったろうか？

インドネシア人筆者の認識不足はそれとして、本当は銃殺されたにも関わらず、その認識不足のために斬首というイメージが頭にこびりついていたからなのか、それとも斬首断頭という日本人の残虐性を故意に誘導しているのか、あるいは実際に斬首が行われたのか、それがはっきりしないのである。そこにこのような事情がからまっているからだ。

オランダ語ウィキによれば、ジャカルタ北部アンチョル地区で日本軍政期に憲兵隊が行った処刑に関する戦争犯罪調査が1946年6月に開始された。近くに古い中国寺院がある一角には粗雑に作られたコンクリート構造物があり、中国寺院の番人から情報を得た調査班は構造物周辺に4百から6百の処刑された遺体が埋められていることを知る。周辺一帯が掘り起こされ、ひとつの遺体だけの穴から集団の遺体の穴までさまざまな規模のものが明らかにされて、遺体は整理された。[続く]

「ブリタル反乱(6)」(2019年12月23日)

その場所一帯は整地されて戦争の犠牲となったひとびとの墓地とされ、1946年9月にオランダ語でイーレフェルド(英語訳 Field of Honor)と名付けられて公式にオープンした。ジャカルタにはアンチョルの他にメンテンプロ Menteng Pulo にもイーレフェルドがある。

日本軍憲兵隊が処刑した遺体はアンチョルのあちこちで見つかった。決してその中国寺院に近い場所でのみ行われていたのではなかったのだ。今やアンチョルのイーレフェルドには2千の遺体が埋められているが、アイデンティティの不明な遺体の方が多く、それらは大きな墓穴に共同で埋めなおされている。

蘭領東インド軍スマトラ島中部地区司令官オーヴァラッカー少将をはじめ、多数のオランダ軍人や民間人、あるいは連合国の軍人・民間人、そして女性から子供までもが、アンチョルで処刑されていたことが判明している。ムラディと他の五人もその中に混じっていた違いあるまい。それとも、そこから近い川に遺体が投げ込まれていれば、ワニの餌食になったことは疑いない。そうなれば遺体は消滅し、墓も存在しなくなる。

たとえ軍律会議という公式の手続きを踏んで死刑の判決を下したとしても、憲兵隊が処刑を行ったのであるなら、三年半の間に2千人を処刑した者たちが公式手続きを踏み、銃殺隊を編成して執行するという儀式手順を本当に踏んだのかどうかの確信が持てなくなる。

アンチョルで発見された2千の遺体のうちの何人が正式な裁判で死刑を宣告されたのか、そのことからしてわれわれは暗闇の中に投げ出されてしまうのだから。

当時、インドネシア民衆の代表者として日本軍政に協力していたスカルノは、スプリヤディの反乱計画を事

前に知っていた。たまたまブリタルを訪れたスカルノに反乱計画首謀者たちは会見し、スカルノの意見、というより支援を求めたのだ。

スカルノがブリタルを訪れたのは、当時かれの両親がブリタルに住んでいたからだ。スカルノの父親はラデン・スクミ・ソスロディハルジョで、ラデンという尊称が示す通りのプリアイ階層であり、母親はイダ・アユ・ニョマン・ライで、こちらもバリ島ブレレン Buleleng 王家の一族に生まれた女性だ。

父親は学校教師で、シガラジャ Singaraja の小学校に勤務しているときに母親と知り合い、結婚した。オランダ植民地政庁文部省の教員だったために、かれはスラバヤ・ジョンバン・モジョクルト・ブリタルなどあちこちに転勤を命じられている。そのスラバヤ時代にスカルノが生まれた。父親は1945年5月に、息子の独立宣言を聞く前に71歳の生涯をジャカルタで閉じた。

ジョンバン時代のスカルノは病弱だったために父方の祖父に預けられてトゥルンガグンで暮らした。モジョクルト時代になって一家が共に暮らすことができたが、父親がブリタルに転勤になると、スカルノは学業のためにスラバヤで下宿生活を始める。両親はその後ブリタルに家を持ったため、スカルノにとってはブリタルが実家のある町になったが、ブリタルの町自体はかれにとってなじみのある町ではなかったようだ。だが最終的に母親も1958年9月にブリタルで77歳の生涯を終えた。スカルノ自身も1970年6月に69歳で波乱の生涯を閉じ、両親の墓があるブリタルに埋葬された。

スカルノがブリタルの実家に戻っていたある日、ブリタル大団の青年将校数人が面会を求めてきた。それは反乱挙行の一週間前だったそうだ。スプリアディが懼れる顔もなく、反乱計画をスカルノに打ち明ける。

だがスカルノの考えは違っていた。インドネシアの独立は日本軍を追い払うだけで実現されるものではない。スカルノの目はもっと遠くを見ていた。今もし全土のペタが一斉に蜂起すれば、インドネシアの独立構想はご破算になってしまう。そんなことが起こってはならない。スカルノは言った。

「もっとよく考えたまえ。そのメリットとデメリットをよく見比べるんだ。君たちは自分の立場から一面的に物事を見ているだけだ。それではうまく行かない。時期がまだ早すぎるのだ。日本軍の力を見くびってはいけない。君たちの軍事力は計画を成功させるだけの力をまだ持っていない。まだまだ時期尚早なのだよ。君たちの計画は失敗するだろう。そのときわたしにできることは何もない。反乱計画を知っていたかと日本人に聞かれたら、わたしは白を切る。君たち青年の潔癖な心情と情熱がもたらす美しいものにも、顔をそむけざるを得ない。そうしなければわたしにも嫌疑がかかり、死刑になるかもしれない。わたしはインドネシアの本当の独立を実現させることを夢見てきた。わたしにはその実現がもっとも大切なことなのだ。だから君たちの計画が失敗したとき、君たちはわたしの弁護を期待できない。君たち自身でそれを背負うしかないのだ。」[続く]

「ブリタル反乱(7)」(2019年12月24日)

しかし青年たちの明るく元気な声はスカルノの心を暗い影で覆った。「われわれは絶対に勝ちます。保証しますよ。きつとうまくやれる。」

この青年たちを説得してやめさせることは無理だ、とスカルノは思った。若者たちの純な心情は美しい。だが視野の狭さが有為の青年たちの生命を失わせてしまうだろう。本当の独立を勝ち取る時のために、どうしてもその貴重な身命を保っておこうとしないのか。明るく素直な若者の姿を前にして、スカルノはきつと腹立たしかったにちがいあるまい。

インドネシアの独立のために身命を賭す覚悟を持ったこの青年たちと一緒にあって、反乱計画作成に知恵を貸すことができればどんなにうれしいことか。しかし自分はハッタと一緒にジャカルタの日本軍政監部と良好な関係を続けて行かなければならない。インドネシア独立のプログラムは既に目前に迫ってきている。この大切な時期に日本に弓を引けばこれまでの努力は水の泡となる。日本人が独立の約束を反故にすれば、それがたとえ形だけの独立であっても、その看板を掲げる機会さえまた遠ざかっていく。

スカルノの目には、歴史の先にあるものが見えすぎるほど見えていたにちがいあるまい。日本人はインドネシア独立の看板を振りかざしながら、インドネシアをそのコントロール下に置くことに努め、独立をインドネシア人の主体的意思に委ねようとはしない。しかしこの戦争の結末は既に見えている。日本人はインドネシアから去るしかないのだ。日本人が去った後、またヨーロッパ人が、オランダ植民地主義者たちが戻って来るのは明らかだ。

インドネシアの真の独立はそのオランダ植民地主義を叩きのめしてはじめて実現するのである、という真理をスカルノほど深く認識していた者はその時期、インドネシアにいなかったのではないだろうか。

日本人が約束した独立は、欧米人がそれを決して認めないだろうから、インドネシアが国際社会における真の独立国家の座に就けるわけがない。結局は看板だけの独立を掲げてオランダ植民地主義と力を競うことになる。国民の力を束ねるには、看板だけの独立も大切なものだ。

オランダ人との最終戦を闘い抜くために、軍事力と青年たちの身命が必要とされているのである。インドネシア独立にとっての真の敵は日本人ではない。真の敵と戦うためにインドネシア人は日本人から戦いのためのありとあらゆるものを手に入れなければならない。

力づくで日本人からそれを奪おうとすれば、インドネシア側に大きな被害が出ずには済まない。それはオランダ人との最終戦を戦い抜くための貴重な資源が損耗していくことを意味している。

日本人が目の前にいるからかれらを敵として追い払ってしまえば独立できると考える者、欧米から日本の走狗と見られているスカルノが独立を宣言しても欧米は認めてくれないから、日本人を追い落として日本の走狗でないインドネシアが独立を宣言すれば欧米は認めてくれるだろうと考える者、どうしてもかれらは歴史の先行きをもっと冷静に読もうとしないのだろうか？

インドネシア人が日本人との間に武力衝突を起こすことを徹底的に回避し続けたスカルノの姿は、前作「独立宣言前夜」:<http://indo.joho.ciao.jp/koreg/hroklamasi.html> の中にもたっぷりと見出すことができる。毀誉褒貶さまざまなスカルノではあっても、歴史の先を読み通して描いたシナリオを行動に移してそれを実現させた人物の偉大さは、われわれを感動させずにおかないのではあるまいか。

スカルノは結局、ブリタル反乱事件から全面的に身を引いて、すべてを成り行きに任せてしまった。しかしこの事件が脳裏に浮かび上がるたびに、かれは決まって自分を責めた。罪悪感なしにその事件に触れることができなかつたのだ。

その罪悪感に駆られてだろうか、独立インドネシア共和国大統領内閣初めての組閣が1945年8月19日に行われ、その中にスプリヤディが国防大臣に該当する人民保安大臣に指名されていた。[続く]

「ブリタル反乱(終)」(2019年12月26日)

そればかりではない。降伏した日本軍が連合国に命じられてPETAの解散を1945年8月18日に行ったあと、独立インドネシア共和国は8月22日に人民保安庁 Badan Keamanan Rakyat を設立してすぐさま軍隊の編成を開始し、その年10月5日に人民保安軍 Tentara Keamanan Rakyat という名の国軍が創設されてPETAの組織がその中に吸収された。スプリヤディはその新生インドネシア国軍総司令官にも指名されていたのである。

だが2月14日の反乱挙行の日を境にして姿を消したスプリヤディは、自分のために用意された大臣と軍総司令官の座を棒に振った。国中のどこの場所にも、スプリヤディが手を振りながらにこやかに歩み寄って来るシーンは起こらなかつたのだ。

反乱軍を組織して作戦要綱を与え、それを送り出した後、自らはどの部隊にも加わずに姿を消したスプリヤディはどうなったのだろうか？かれの身にいったい何が起こったのだろうか？

大勢の人間に反乱決起を扇動し、反乱軍が出撃するのを送り出し、自らはどの部隊にも加わずに単身で別の方角に向かう反乱首謀者を同志たちは放っておくだろうか？スプリヤディには、自分の行動に関して同志たちを納得させ得るだけの説明がなしには済まなかつたはずだ。

戦後、スプリヤディの同志数人が語ったところでは、かれはクルッ Kelud 山に登ったという話だ。身に着けたクバティナンの力を振るってかれは反乱軍を勝利に導こうと考えたのかもしれない。

スプリヤディと親しかった同志のひとり「君が山から降りてきたら君のサルンを僕にしてくれないか？切れ端で

もいよいよ。」と依頼したが、スプリヤディは山から戻って来なかったと語っている。だが世の中にはさまざまな憶測が流れた。

クルツ火山への道中で猛獣に襲われて死んだ。異界に入るためにクルツ山の火口に身を投げた。クルツの山中もしくは他の場所でモクサの行に入り、姿を消した。実家に逃れてから、あるいは知り合いの別の村の村長宅に隠れ、すべてを捨てて民衆の中に紛れ込んだ。もちろん、日本軍に捕まって処刑されたという話もその中に混じっている。

もし日本軍に殺されたのなら、スプリヤディの親兄弟がどうして憲兵隊に捕らえられて隠れ場所の情報を執拗に尋ねられたのだろうか？あるいはもしも生きていたのなら、スカルノがスプリヤディに大臣の椅子を用意したにもかかわらず、なぜそれに応じなかったのだろうか？

スカルノはスプリヤディが死んでいることを知っていて、組閣の中にスプリヤディの名前を混ぜたのだという説もある。新生インドネシア共和国は日本の傀儡でないことをアピールするために、スプリヤディの名前がそのシンボルに使われたと言うのだ。確かに、23歳の若造に大臣や軍総司令官の職務を委ねようというのは常軌を逸したアイデアではある。

スプリヤディはあの反乱の最中か、あるいはその後に、日本軍に捕まって殺されたとかれの親族は考えていることを義理の弟が語っている。スプリヤディが消えたというのは日本軍がジャワ民衆の感情を鎮めるために行ったプロパガンダだ、とかれは言うのだ。「日本人は上手だ。スプリヤディは姿を消すことができたという話を広めて、ジャワ人の気持ちに隙間を残した。はっきりさせないようにしておけば、思いつめるようなことにならないから。」

反乱のあと、父親はクディリの憲兵隊本部に捕らえられたまま独立宣言の日を迎えた。反乱に参加した者の家族はクルトソノ Kertosono にある、兵隊が厳しく見張っている家を集められて監禁された。9月には全員が処刑されることになっていた。独立宣言がなかったら、大量殺りくが行われていたかもしれない。スプリヤディの親族はそうに語っている。

1975年8月9日に時のスハルト第二代大統領は大統領決定書第063/TK/1975号を出して、スプリヤディを国家英雄に叙した。侵略者に対して反乱を実行したというのがその叙勲の理由である。その理由付けは日本軍が侵略者と定義されていることを物語っている。

スカルノのスプリヤディに対する評価とは雲泥の差だ。スハルトのその行為は、スハルト自身のクジャウエンへの傾注がなさしめたものだったのではないかという気がわたしにはするのだが……[完]